

## 至高性から人間性へ

G. バタイユ著『C 神父』におけるレジスタンスの裏切りと赦し

福島 勲

### 序

バタイユが 1950 年に発表した初小説『C 神父<sup>1</sup>』は、出版当時も含めて、多くの一般読者を獲得したとは言いがたいが、少なからぬ研究者たちが、その迷宮的な構造と豊かな生成研究の可能性に着目し、精緻なテキスト分析を発表している。とはいえ、こうした研究上の脚光は、もっぱら形式面に集中しており、作品の読解——小説の核心をなす主人公ロベールの「裏切り」——に関しては、作家の思想を根拠として、判で押ししたがごとくステレオタイプな解釈が繰り返されているように思われる。すなわち、主人公の理解しがたい行動は「至高性」に到達するための供犠であるといった、やや内実の欠けた理論的・美学的解釈である<sup>2</sup>。ところが、作家が同時期に書いた別の文章——1947 年に『クリティック』誌に掲載された「処刑人と犠牲者についての考察<sup>3</sup>」——を参照してみると、主人公ロベールが神父かつレジスタンスに設定されていることの意味や、彼が恋人と兄弟を「裏切る」ことの意味が、より具体的な文脈の中で浮かび上がってくる。したがって、本稿では、自らの哲学的主題の小説への単なる翻案としてではなく、ナチス占領期からわずか 5 年後という、分裂したアイデンティティの修復期にある 1950 年のフランス社会という時間と場所で本作が執筆されたことに留意しつつ、作家の実存的な生の痕跡が刻まれた虚構として本小説を読解してみたい。

---

<sup>1</sup> Georges Bataille, *L'Abbé C.* (Les Éditions de Minuit, 1950), repris dans *Romans et Récits*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2004, pp. 613-715. 本稿の『C 神父』の引用は全てプレイヤー版による。

<sup>2</sup> Jean-François Louette, « Notice », dans *ibid.*, p. 1271.

<sup>3</sup> Georges Bataille, « Réflexion sur le bourreau et la victime », *Critique*, n° 17, octobre 1947, repris dans *Œuvres Complètes* (以下 OC と表記), t. XI, Gallimard, 1988, pp. 262-267.

## 1. 『C 神父』の失敗

レジスタンスの活動時間である真夜中をその名前の由来に持つミニユイ社から 1950 年に出版された『C 神父』は、バタイユが自分の署名で出版した初小説 (roman<sup>4</sup>) でありながら、筆名で出版した『マダム・エドワルダ』や『眼球譚』、また後に実名で出版した『空の青み』に比べると、代表作と言うには、やや地味な作品であることは否めない。事実、フランスで出版された 1950 年当時の反応も凡庸なものであり、初年度に売れたのはわずか 228 部である<sup>5</sup>。ちなみに、この作品の出版が当時もたらした唯一の印象的な出来事は、ジャン・ポーランが設立し、当時はアラゴンが編集長だった共産党系の文化雑誌『レトル・フランセーズ』とミニユイ社との間で起きた訴訟事件である。すなわち、作品の内容がレジスタンスを貶める内容だと怒った前者が後者を糾弾する記事を掲載し、後者が前者を名誉毀損で訴えたのである<sup>6</sup>。

だが、このスキャンダルにもかかわらず、バタイユの処女小説は当たらなかった。プレイヤード版の編者ジャン＝フランソワ・ルエットは、この作品が不首尾に終わった原因を小説の不出来に帰して、その理由を二つにまとめている<sup>7</sup>。一つは、作品構造がむやみに複雑であるという点において『C 神父』は、もっともバタイユらしくない作品<sup>8</sup>である。さらに、この作品が扱っている「裏切り」という主題については、占領期後の戦後のフランス小説ではありふれた主題だったと分析している。また、バルガス・リョサやジル・ドゥルーズの言葉まで援用して、前者には小説技法の未完成さについて語ら

---

<sup>4</sup> バタイユはこの作品を「物語 *récit*」ではなく「小説 *roman*」というジャンルであることを明記することにこだわっていた。それは、この時期、バタイユが「小説 *roman*」という形式に「狂気」を表現するための特権的なイメージを託していたからである。Cf. « Notice » de *L'Abbé C.*, *op. cit.*, pp. 1257-1258 ; Georges Bataille, « Le roman et la folie », *Critique*, n° 39, août 1949, repris dans *OC*, t. XI, pp. 526-528.

<sup>5</sup> Anne Simonin, *Les Éditions du Minuit 1942-1955 : Le devoir d'insoumission*, IMEC, 1994, pp. 340-347. ちなみに、前年の 1949 年に同社から出版された、政治参加する共産党よりのカトリック神父ジャン・ブリエ (すなわち「B 神父」) が書いた『司祭が態度を示すとき *Un Prêtre prend position*』がわずか半年で 3000 部以上売れたのとは対照的な数字である。

<sup>6</sup> Voir Denis Hollier, « Bataille devant la critique communiste », *Georges Batailles, Actes du Colloque international d'Amsterdam (21 et 22 juin 1985)*, textes réunis et présentés par Jan Versteeg, Rodopi, 1987 ; Anne Simonin, *op. cit.*.

<sup>7</sup> Voir « Notice » de *L'Abbé C.*, *op. cit.*, p. 1283 : « ce relatif insuccès » ; p. 1284 : « ce mince succès ».

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 1284 : « *L'Abbé C.* est celui de ses livres où Bataille est le moins. »

せるとともに、後者には神を冒瀆してまだ喜べるのは敬虔な神学生ぐらいだと、この小説と時代との懸隔について代弁させている<sup>9</sup>。

この分析に従うならば、小説『C 神父』は、二重の意味で失敗していたことになる。すなわち、形式の「複雑さ」と内容の「凡庸さ」によってである。

形式に関して言えば、その複雑さは否定のしようがない。作者がしかけた入れ子構造は錯綜を極め、どうにか読み通すことはできても、そのメタフィクション構造の全体はなかなか見通せない。まるでかろうじて抜け出した迷路である。しかしながら、迷宮がその囚人に眩暈を教えるように、迷宮的作品は謎の周囲をめぐる彷徨という独特な体験をもたらす。この意味において、構成の複雑さは必ずしも作品の質を損なうものではない。そもそも、作品とは、雨水と地下水が石灰岩を溶食して生じる鍾乳石の洞窟にも比すべき性格を有しており、その底なしの奥行きは、作者の意図でもあるし、それを越えてもいる。それが作品の強みでもあり、構造分析や生成研究の最大の興味もそこにある。

その一方、内容面に関して言えば、ルエットらの説明する通り、それが単なる「裏切り」の物語であり、神父が流聖に身をゆだねる「至高な」悦びの物語であるとしたなら、たしかに小説としては凡庸であり、斬新さに欠けると認めざるをえない。しかも、偶然か必然か、本作品の出版が、1947年に始まる文壇を席卷したサド・ブームの最中であったことを考えれば、ロベールことC神父の「裏切り」行為が、サド風の倒錯の哲学の垂流、しかも、本家よりも風味の弱いまい物として受容されてしまったとしても無理はないだろう<sup>10</sup>。しかしながら、内容面に関しては、私たちは主人公の神父ロベールの理解しがたい「裏切り」行為を、「至高性」というバタイユのできあいの概念に結びつけて読解したつもりになってしまっていないだろうか。その結果、この小説が持っていた内容面での奥行きを見逃してしまっていないだろうか。

---

<sup>9</sup> また、「裏切り」をめぐるジャン・ジュネとの競合も指摘されている。Voir *ibid.*, p. 1264.

<sup>10</sup> ビエール・クロソウスキーの批評もこうした観点に立脚しているように思われる。

Pierre Klossowski, « La messe de Georges Bataille : A propos de l'Abbé C... », in *Un si funeste désir*, Gallimard, 1963, pp. 121-132.

## 2. 証言する死者たち

### あらすじ

この小説は三人の話者による文章からなっている。はじめに、シャルルから原稿を託された経緯を語る編者の物語（第1部）があり、その後にシャルルの書いた文章（第2部、第3部）が続き、ロベールが残した文章（第4部）が挿入され、最後に再び編者が現れて物語を終える（第5部）という構成である。

第1部：序文・編者の物語

第2部：シャルル・Cの物語

第3部：シャルル・Cの物語のエピローグ

第4部：C神父のメモ

第5部：編者の物語の続き

主な登場人物は、編者、双子のシャルルとロベール、幼なじみのエポニーヌの三人である。ある日、編者は友人のシャルルに呼び出され、原稿の出版を託される。原稿はシャルルが書いた文章と、その双子の亡き兄弟ロベールの文章（ただし、清書したのはシャルル）である。編者によると、原稿を渡した二ヶ月後、シャルルは自殺している（第1部）。

シャルルが残した物語の中心は、瓜二つだという双子の兄弟ロベールである。ロベールは司祭であり、清廉な生活を送っている。ところが、シャルルの愛人であり、双子の幼馴染のエポニーヌは、瓜二つでありながら自分になびかないロベールに苛立ち、彼を誘惑したいと考える。シャルルはその交渉役となるが、ロベールは固辞し、エポニーヌを激昂させる。ところで、エポニーヌの部屋の窓下に毎晩、汚物を残していく者がいる。犯人はエポニーヌの別の愛人である肉屋のアフリだと思っていたが、ある晩、汚物を残していく人影がロベールに似ていることを二人は発見する。ロベールが司祭をつとめるミサの日、教会につめかけた聴衆とシャルルとエポニーヌの眼前で、突如、ロベールが倒れる。ただし、それが演技であったことをシャルルだけが教えられる。ロベールは病気で寝込んでいる（ふりをしている）が、汚物は置かれ続ける。ある晩、ロベールはパリから来ていた二人の女とともに姿を消す。（第2部）。

その後、ロベールがゲシュタポに逮捕されて獄死したという知らせが届く。ロベールの逮捕直後に現れたゲシュタポに拘束され、エポニーヌも獄死する。シャルルは病気のため、ゲシュタポの現れる前日に幸運にも村を離れていたため難を逃れた（第3部）。

その後、村から姿を消したロベールが滞在していたホテルの部屋で発見された、汚物を残しに行く喜びや放蕩を賛美するロベールのメモが転載され、シャルルから託された原稿は終わる（第4部）。

語り手は編者に戻る。しかし、実質の発話者はシャルルである。シャルルが原稿を書き上げたあと、ロベールと同じ独房にいたと言う収容所帰りの青年の訪問があり、彼はシャルルにロベールの最期の言葉を伝える。青年によると、ゲシュタポの拷問を受けて、ロベールは最も愛するシャルルとエポニーヌの名前を出したと言う。奇妙なことに、それ以上に過酷な拷問を受けても、本物のレジスタンスの仲間たちの名前は絶対出さなかったとのことだ。青年にそれを告げたあと、ロベールは死んでいる。ロベールの最後の言葉を青年がシャルルに伝え、青年の言葉をシャルルが編者に伝え、シャルルの言葉を編者が読者に伝えて、この小説は終わる（第5部）。

### 死者たちの伝言ゲーム

まず、形式面における「複雑さ」を確認しておこう。この作品には少なくとも三人の語り手、すなわち、編者、シャルル、ロベールがいる。しかし、この三人が紡ぐディスクールには、つねに疑わしさがつきまとう。というのも、この小説のディスクールは全てが伝聞（誰かが誰かに託された）で成立しており、その真実を探求しようと一度試みるや、読者は迷宮の中から抜け出せなくなってしまう。物語全体が底なしの決定不能性の中に置かれているのだ。

例えば、それが最も特徴的に現れているのが、「第5部」のディスクール、すなわち、ロベールの最後の言葉を伝える元収容者との出会いを語るシャルルの物語を編者が語るという枠組みである。第一の関門では、まず読者は編者の権威を信用せねばならない。さもなくば、この小説全体が支えを失い、全ては編者の妄想となってしまう。よろしい、語り手である編者のディスクールの権威は認めることにしよう。だが、すぐに第二の関門が現れる。今度はシャルルのディスクールの真実性が不安になる。では、さらに奮発して、編者とシャルルのディスクールの権威も認めることにしよう。だが、すぐに第三の関門が現れる。果たして収容所帰りの青年は本当のことを言っていた

のだろうか。ならば、大振る舞いとばかりに、編者、シャルル、収容所帰りの青年の誰もが嘘をついていないと信用することにしよう。ところが、第四の関門として、最初のロベールが嘘をついていないとも限らないのである……。

小説は幾重もの入れ子構造になっており、その真実には誰も到達することができない。結局のところ、この小説のディスクールは、全編にわたって、誰かが誰かに託した証言、伝言ゲームで構成されており、この伝言の迷宮の中で、読者が無条件に信用できるディスクールは一つもない。

さらに、この曖昧さに輪をかけているのは、物語の主要登場人物たち、すなわち、編者以外の語り手であるシャルルとロベール、さらにはエポニーヌまでもが死者であるという事実である。言ってみれば、この小説は、死者の証言をめぐる物語であり、裏切った死者（ロベール）と裏切られた死者（シャルル、エポニーヌ）をめぐる物語、裏切られた死者（シャルル）による裏切った死者（ロベール）をめぐる物語なのである。そこでの編者の役割とは、死者を召喚し、死者の声を聞かせる霊媒のそれであるが、死者の声だといいい聞かされながらそれを聞く読者は、うなずきながら拝聴はするものの、つねに去来する疑念を払拭することは決してできない。一体、本当は誰が話しているのか。それにしても、バタイユは、この物語を小説にするのに、どうしてこれほど複雑な構成を必要としたのだろうか<sup>11</sup>。

### 3. 豊穡と貧困

#### 形式分析の豊穡

以上に見たように、出版時の読者受けとは裏腹に、『C 神父』の物語構成には極めて意識的な配慮が見られる。ブリアン・T・フィッチュは本作品の入れ子構造に着目し、箱の中に箱があり、永遠にその謎の中身には到達できないことや、双子のシャルルとロベール、ロベールと肉屋のアンリという登場人物の相似と二重化 (*dédoublement*) という存在様式を指摘している<sup>12</sup>。また、

---

<sup>11</sup> ちなみに Walter Geerts Anvers は三人の書き手のディスクールの詩学を分析しており、とりわけシャルルの詩学は隠すことであり、それがこの物語の読解を困難にしていると指摘している。Walter Geerts Anvers, « L'Abbé C. de Georges Bataille : souveraineté et tradition romanesque », dans *Le Topos du manuscrit trouvé, hommage à Christian Angelet*, Éditions Peeters, 1999, pp. 457-458 : « Alors qu'un récit normal met en évidence son objet, Charles, le narrateur-escamoteur, le laisse « à l'ombre » ».

<sup>12</sup> Brian T. Fitch, *Monde à envers, texte réversible : la fiction de Georges Bataille*, Minard,

エリザベート・ボッシュは、この小説の分析にモノグラフィを捧げ<sup>13</sup>、発話者間の言説の断層（編者の前書き、後書き、シャルルの物語、ロベールの残したメモ）や<sup>14</sup>、発話者内の断層（ロベールの残したメモにおける *je/il* の交代<sup>15</sup>）の精緻かつ網羅的な構造分析を行い、この小説でバタイユが厳密に構築していた「隠された構造」を丁寧に析出している<sup>16</sup>。さらには、「C 神父 (Abbé C)」という言葉が「アベセー」という音を介して、「ABC」、「Abaissé」と結びついていく音声レベルでの連関も、登場人物の名前や単語のレベルにおいて、多くの指摘がなされている<sup>17</sup>。

一方、生成研究においても横断的な間テクスト性が検討されている。小説の生成に影響を与えた外部のテクストとして、バタイユ以外のものでは、コンスタンの『アドルフ』との作品構造の類似<sup>18</sup>、ベルナノスの『欺瞞』に出てくる神父との類似<sup>19</sup>、そして、最も決定的なのは、バタイユの『クリティック』誌の記事「怪物的な小説<sup>20</sup>」によっても裏付けられるイギリス人作家ジェイムズ・ホッグの翻訳との関係が詳細に分析されている<sup>21</sup>。また、バタイユの自身のテクストでは、『詩の憎悪』や「分裂増殖」が同じ分身のテーマを扱っているし、『C 神父』の一部にほぼそのまま流用されている前年の1949年に出版された『エポニーヌ』との関係も作品の生成過程を考える上で極めて興味深い例となっている<sup>22</sup>。

---

1982.

<sup>13</sup> Elisabeth Bosch, *L'Abbé C de Georges Bataille, les structures masquées du double*, Rodopi, 1983.

<sup>14</sup> *Ibid.*, pp. 10-40.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 104.

<sup>16</sup> また、第2部「シャルル・Cの物語」における18章の構成と、アンジェラ・ディ・フォリーニョが自らの生の不完全さを認識する「18のステップ」との対応が指摘されている。Voir *Ibid.*, p. 113)。

<sup>17</sup> 例えば、「Madame Hanusse」と「anus」の音の類似などである。

<sup>18</sup> Walter Geerts Anvers, *op. cit.*, pp. 449-459.

<sup>19</sup> ドイツ語版『C 神父』の Bernd Mattheus の解説の指摘を受けて、ルエットも分析を試みている。「Notice」de *L'Abbé C.*, *op. cit.*, pp. 1279-1280 ; Jean-François Louette, « De l'art lazaréen », dans *Ecrire après Auschwitz: mémoires croisées France-Allemagne*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 2006, p. 46.

<sup>20</sup> まさしく、ホッグの作品には Robert という怪物的人物が出てくる。Georges Bataille, « Un roman monstrueux », *Critique*, n° 37, juin 1949, pp. 483-492, repris dans *OC*, t. XI, pp. 487-496.

<sup>21</sup> Francis Marmande, « L'incitation ou l'œil de l'histoire », dans *Georges Bataille et la fiction*, Rodopi, 1992, pp. 49-57.

<sup>22</sup> *Ibid.* また、Jean-Louis Cornille, « un rat dans la bibliothèque », *Revue de la littérature comparée*, n° 313, janvier 2005, pp. 35-50 は、これまでの生成研究史をまとめた上で、

## 作品解釈の貧困

なるほど、小説『C 神父』は、小説そのものとしては多くの読者を獲得することに成功しなかったけれども、構造分析と生成研究においては、精緻な分析に耐える豊穡な可能性を有した研究素材であることがわかる。しかし、構造分析にせよ、生成研究にせよ、形式的な側面に関する研究が『C 神父』の文学作品としての可能性を引き出しているのは喜ばしい反面、気にかかるのは、内容面に関する解釈、より具体的に言えば、この物語の最大の「謎」をなしている主人公ロベールの裏切り行為に関する解釈のステレオタイプ化である。冒頭でも触れたように、どの研究者もまるで判で押したかのように、ロベールが理解しがたい「裏切り」行為（本物のレジスタンスの仲間の名前は出さなかったのに、レジスタンスとは無関係な自分の兄弟とその恋人の名前をわざわざ出した）をした理由として、最も愛する人間をゲシュタポに売るという非合理的、非道徳的な行為を行うことによって「至高者」になったという解釈を提示している。

例えば、先にも名前をあげた優れた構造分析を行うボッシュも、この場面の解釈に関しては「死を前にしての喜び」や「至高性」というステレオタイプを逃れていない。

死後に完成される神との合一をめざすカトリックの神秘家たちの探求とは反対に、ロベールのそれは「死を前にしての喜び」であり、彼岸に何の見返りも期待していない人間の恍惚、すなわち至高性である<sup>23</sup>。

また、プレイヤー版の『C 神父』校訂者のルエットも同工異曲である。

したがって、ロベール神父は自らの供犠と他人の供犠を同時に行うことになる。 […] 供犠と同じく、裏切りは喪失の一形態になるだろう。それは快楽の一形態でもある。供犠の行為においては「極度の喜び」が感受される。その条件には「殺すこと、道徳的に残酷になること、死と […] 一致すること」である<sup>24</sup>。

バタイユにおいては、神的なものは主語である。神的なものとは裏切りであり、それゆえ〈善〉と〈悪〉の反転可能性が現れる……（こうした考えはどこから

---

カフカの『城』との関係を提起している。

<sup>23</sup> Elisabeth Bosch, *op. cit.*, p. 129 ; voir aussi pp. 119-120.

<sup>24</sup> Jean-François Louette, « Notice » de *L'Abbé C.*, *op. cit.*, p. 1271.



来たのか。バタイユはマルセル・モースを読んだ。それ以後、清浄と不浄という聖なるものの両義性が頭を離れなかったのではないだろうか<sup>25</sup>)。

すなわち、両者とも、ロベールの裏切りは非合理的な一つの「供犠」、流聖の道に入り込んだロベールが自らが神に等しい至高者にいたるための死を前にした「至高な」儀式であったという解釈に落ち着いている。

なるほど、彼らが依拠しているのは、アセファル時代の「死を前にした喜び」やバタイユのテキストに頻出する「供犠」や「至高性」といった彼の思想を代表する概念である。しかしながら、ゲシュタポによってまさに死の恐怖に直面させられたロベールが、その瞬間、「死を前にした喜び」に満たされ、あらゆる執着や人間的な感情からも解放されて、無関係かつ最も愛するロベールとエポニーヌを犠牲者とする供犠を実行したと読解することに、果たしてどれだけの意味があるのだろうか。バタイユの概念を参照していることで、まことしやかに解釈を施しているように見えながら、この小説の文脈に即した読解という次元で考えたとき、これらの解釈はほとんど何も説明していないに等しい。こうしたバタイユの概念を判で押ししたような解釈では、この複雑な形式を持った小説の「謎」を解読するにはやや単純過ぎるのではないだろうか。

#### 4. 至高性から遠く離れて

##### 裏切りから信頼へ

もう一度、元収容者の青年から聞いたロベールの最後の言葉を編者に伝える、シャルルの言葉を読み直してみよう。

ロベールは前もって何ひとつ考えていたわけじゃない。自分の愛する人々をゲシュタポに与えることを〈選んで〉したわけじゃないんだ<sup>26</sup>。

ロベールの裏切りは予定されていたことでも、意志されたのでもなく<sup>27</sup>、偶発的な事故のように、突然降りかかるように起きたことが強調されている<sup>28</sup>。

---

<sup>25</sup> Jean-François Louette, « De l'art lazaréen », *op. cit.*, p. 46.

<sup>26</sup> *L'Abbé C.*, *op. cit.*, p. 714.

<sup>27</sup> 小説中では元収容者が「カルヴァン主義者」と明記されている。一つには、レジスタンスにおけるカルヴァン的な厳格主義が、他方では、カルヴァンの唱えた予定説的な思考法が示唆されている。後者には、ロベールの裏切りの「偶然性」が対置されることになる。

では、その偶然の出来<sup>しゅつらい</sup>を可能にした状況とは何か。それは先に話題になった「死を前にした喜び」などではなく、拷問という極限的状況における死への絶対的な恐怖である。つまり、肉体的苦痛と死への恐怖が、ロベールに誰かの名前を出す以外にこの絶体絶命の状況から逃れる道はないと決断させたのである。しかしながら、ロベールが出した名前が、本物のレジスタンスの仲間ではなく、無関係の自分の弟と恋人であり、しかも、彼の最愛の二人だったことが、この小説におけるもっとも重要な「謎」の一つである。

「ロベールは元収容者につかみかかるように言った。『僕は抵抗しなくなかった。そうしなくなかったし、抵抗したなんて思わないでほしい。その証拠に、僕は自分の兄弟と自分の恋人を売ったんだ。』元収容者は当惑して、売った人々を愛していたのか憎んでいたのか知りたいと考えた。[...] ロベールはまさしく最も愛している人間を売ったと答えた。それを聞いた元収容者は、拷問のせいではロベールの頭がおかしくなったのだと思った<sup>29</sup>。」

何故、ロベールは最も愛する二人を売ったのか。多くの読者や解釈者たちを戸惑わせているこの「謎」であるが、これは二人への憎しみではなく、むしろ愛情によって説明される。つまり、世界の中でこの二人だけが、ロベールの弱さを理解し、軟弱者 (*lâche*) のロベールが恐怖の中で彼らを裏切ることが赦してくれる唯一の存在だと彼には信じられたのである。ロベールは次のように説明している。

最終的に、僕はレジスタンスたちの名前を出すことは拒んだ。それは彼らを愛していなかったから、もしくは、忠誠として、仲間を愛するという意味において、彼らを愛していたに過ぎないからだ<sup>30</sup>。

ロベールにとって、シャルル、エポニーヌとの関係はレジスタンスとの関係とはまったく別の次元にある。レジスタンスの同志との関係は義務によるものだが、シャルルとエポニーヌとの関係は「愛する」という動詞に基づいた関係である。だが、どうして二人を「愛している」ことが彼らを裏切ることにつながるのか。本文では曖昧なままだが、『C 神父』の草稿を見ると、ロ

---

<sup>28</sup> 草稿内の文章もそれを裏付ける。Cf. « *Autour de L'Abbé C.* », *ibid.*, p. 741 : « Je n'avais aucun besoin que mon frère m'accompagne dans la mort ni mon frère ni ma maîtresse, mais ne croyez pas que je souffre de les avoir donnés. Sans doute je n'ai pas fait ce qui m'a plu, mais c'est mieux ainsi. »

<sup>29</sup> *L'Abbé C.*, *ibid.*, p. 713.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 714.

ベールが最愛の二人をゲシュタポに委ねたその論理をより明確に読み取ることができる。

勇敢にしていると、自分がどんどん自分ではなくなっているような気がしてきた。僕は笑っていた。いやむしろ、自分にもよくわからない、ちっぽけな笑いのかけらが僕の中で響いていた。というのは、恐怖の中で、これ以外の方法はないと気がついたからだ。僕はレジスタンスの仲間たちを売れるほど、彼らを愛していなかった。僕の兄弟なら、事情を知れば僕を理解してくれると確信している。僕の恋人も同じだ [この後、途絶<sup>31</sup>]

もちろん全てが言いつくされているわけではないが、幼少期のロベールの行動も含めて、小説の文脈に即して考えていけば、この言葉を理解するのはそれほど難しくはない。

## 二つの裏切り

そもそも、幼少の頃から、ロベールは肉体的苦痛に耐えられない「弱い (lâche)」人間だとされている。「弱さ」はロベールの本性であり、それはロベールに幼馴染の二人を二回裏切らせている。一度目は、肉屋のアンリの「虐待 (séVICES<sup>32</sup>)」の恐怖から逃がれるために聖職者になったことである (第一の裏切り<sup>33</sup>)。このロベールの転身は幼馴染の二人を失望させたが、それでも彼らがロベールへの興味を捨てることはなかった。彼らはロベールの「弱さ」を受け入れたのである。ロベールの方も彼らの寛容を知っていた。

そして、大人になったロベールに今度はゲシュタポの拷問という「虐待 (séVICES<sup>34</sup>)」が迫る。その時、ロベールは二度目の裏切りを行う。目の前の肉体的苦痛と死の恐怖から逃れるため、彼は愛する二人の名前を出す (第二の裏切り)。たしかに、この二度目の裏切りは『『道徳的に』表現しがたい<sup>35</sup>』。実際、「供犠」や「至高性」といった、逆説の思想家パタイユの概念でも持ち出さない限り、これを理解するのは不可能にも見える。しかしながら、パタイユの概念が、逆説的に見えながらも、実際は透徹した理解可能な論理に

---

<sup>31</sup> « Autour de L'Abbé C. », *ibid.*, p. 741.

<sup>32</sup> L'Abbé C., *ibid.*, p. 695.

<sup>33</sup> この幼馴染にして肉屋の村民は後のゲシュタポの前兆である。ともにロベールに「虐待 (séVICES)」を行う。

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 714.

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 696.

裏打ちされているように、ロベールの二度目の裏切りも次のように整理される。

### 最愛の者を売る三つの理由

ロベールの二度目の裏切りは、三つの要素によって構成されている。第一の要素は、彼の「弱さ」である。彼には拷問の苦痛と恐怖に耐えることはできない。それは彼の本性に関わるものであり、善悪の問題ではない。この恐怖を逃れるためには、ロベールには誰かの名前を出すという「悪」を行う以外の方法はない。

ただし、裏切り以外の選択肢がないという状況において、ロベールには、本物のレジスタンスの名前を出すことはできなかった。なぜなら、裏切りをしても、彼らが赦してくれるとはロベールには思えなかったからである。ロベールはそこまで彼らを信頼していない（そこまで「彼らを愛していなかった」）。そもそも裏切りは赦さないという制度的な前提がある以上、レジスタンスの人々に自分を救う道を期待することはできない。これが第二の要素である。

とはいえ、拷問を逃れるためには誰かを売らねばならない。しかもレジスタンス以外である。追い詰められた状況下で、ロベールは自分の犠牲になってくれる人間、しかも彼の「弱さ」を赦してくれる人間を探す。見つかったのは、彼が最も愛する二人、すなわち、シャルルとエポニーヌである。自分の分身とも言えるシャルルとその恋人である二人は<sup>36</sup>、第一の裏切りのあとも自分を赦してくれた。こうした実績に基づく彼らへの信頼によって、ロベールは彼らを売る<sup>37</sup>。つまり、二人への絶対の信頼、これがロベールに最愛の者を裏切らせた第三の要素である。

まとめてみれば、この物語は「裏切り<sup>38</sup>」の物語であるよりも、まず第一に「弱さ lâcheté<sup>39</sup>」の物語であり、さらに言うなら、その「弱さ」を赦してくれる相手に対する「信頼」の物語なのである。この小説に「裏切り」とい

---

<sup>36</sup> 実際のエポニーヌはシャルルの恋人だがロベールは「僕の恋人」と表現している。

<sup>37</sup> もちろん、単に自分が助かるためだけでなく、レジスタンスの仲間たちを守るために自分の身内（売っても自分を赦してくれると信じた人間）を売ったという方向での立論も興味深い結果をもたらすかもしれない。

<sup>38</sup> Cf. Denis Hollier, *op. cit.*, p. 69 : « *L'abbé C. est bien une manière d'apologie de la trahison. Le mot revient à de nombreuses reprises.* »

<sup>39</sup> 作品には« trahison »と同じく« lâche », « lâcheté »という語が頻出する。

う行為が介入してくるのは、それは「至高な」目的としてではなく、単に虹的な結果として現象したに過ぎない。

ただし、この物語は谷崎の『春琴抄』のように究極の愛の美談では終わらない。結局、二人の名前を出したあと、我に返ったロベールは、自分の裏切りを恥じながら、苦悶のうちに死に絶えたし<sup>40</sup>、エポニーヌは密告の直後に逮捕され、獄死している。偶然に難を逃れたシャルルも、理解不能な兄の行為に苦しみ、結局は自殺している。つまり、ロベールの裏切りの「謎」が上述のように三つの要素で解説可能されたとしても、より重要で、しかも決して解説されることのない新たな謎がそこから生じている。すなわち、ロベールの裏切りをシャルルとエポニーヌは赦したのだろうか。全員が死者である以上、この最後の「謎」が解説されることはない。この物語の謎は解かれず、引き裂かれたままに終わる。作者はこの小説を、隠された意図や判断を探し当てる物語としてではなく、開いたままに、謎を謎として秘めた物語として終わらせるのである。

## 5. 拷問者／犠牲者

### 裏切りか死か

ロベールの行動は確かに勇敢ではない。だが、拷問に屈したロベールを誰が責められるだろうか。パタイヌは、(編者が伝える)シャルルの証言とともに、元収容者に次のように語らせている。

元収容者も拷問の経験者だった。抵抗したかどうか口にはしなかったが、彼が抵抗したのは明らかだった。だが、彼は悲しげに僕 [シャルル] に言った。抵抗を貫けなかった人々を責めるやつらを殺してやりたい気がする。彼は屈した人々に同情していた。彼にしてみれば、それは私たちに起こり得る最も不幸な出来事なのだ<sup>41</sup>。

この小説が問題にしているのは、ロベールが裏切りによって神や「至高者」になれたかどうかなどという抽象的な話ではない。ここで問題にされているのは、普通の人間が錯乱もせずに他の人間に対して非人間的な行為をしようという事実であり、人間はこうした行為に耐えることはできないという、第二次世界大戦で極端なたちで確認することになった単純な事実である。実

---

<sup>40</sup> Cf. *ibid.*, p. 714 : « si je souffre de mes crimes, mais c'est pour en jouir plus profondément. »

<sup>41</sup> *L'Abbé C., op.cit.*, p. 712.

際、戦地でなくても、1940-1944年のナチス占領期のフランスでは、ナチス占領軍、ヴィシー政権、対独協力者、レジスタンス、積極的ないし消極的な反ユダヤ主義者、共産主義者といったさまざまな陣営の分裂や対立があり、そこには新たな暴力の場が生み出されていた。ユダヤ人の強制移送はもちろん、逮捕したレジスタンスに対するゲシュタポの拷問があり、この拷問はレジスタンスの内部にさらなる敵・味方を作り出す機会となった。つまり、拷問の際、仲間の名前をもらしていれば裏切り者と糾弾され、時には敵以上の軽蔑を受ける一方、名前をもらさずに死ねば英雄として聖別されるのである。

キリストの弟子の一人を持ち出すまでもなく、裏切りは最大の罪の一つとされてきた。しかしながら、いかなる場合にも裏切るのは絶対的に罪であり、むしろ拷問において殉死を遂げることが名誉であるという論理（キリスト教でも磔刑のキリスト自身や殉教者たちがそうした聖別を受けている）には、何か教条主義的なものが潜んでいるとは言えないだろうか。そこには拷問する側と同じ種類の残酷さがありはしないだろうか<sup>42</sup>。そもそも、拷問という非人間的な状況は、人間がその意志を行使できる範囲内に位置しているのだろうか。

### 弱さという人間性

バタイユがロベールの「弱さ」を通じて描き出そうとしたものは、拷問という極限状態に直面した等身大の人間性である。拷問は人間には耐えられないもの、むしろ、人間が耐える必要のないものなのである。それは人間が人間に対して行使する暴力の中でも最悪なものの一つである。『C 神父』の草稿には、拷問に関するバタイユのこうした考えが見られる。

拷問の話を読むと、語られている拷問をこの身に感じる。私は書こう。人間本性とは私の本性のことでもあるが、それは拷問よりも弱く、残虐な苦痛に従う運命にある。あらゆる喜びはこの無力さの汚辱の中にある。人々が拷問を行うのは、彼らの考えでは、最終的に、人間本性が無力さに屈するはずだからである。彼らがそう考えている以上、誰も何もできはしない。私は足のつま先まで無力さそのものである。死が私を侵食してくれるのは、無力さ、すなわち、苦痛を耐えることができない無力さによってである。生が崩れ去り、生が苦痛に屈し、苦痛が希望を奪い去るこの地獄で生を愛し続さねばいけないのだろうか。

---

<sup>42</sup> « Autour de *L'Abbé C.* », *ibid.*, p. 724 : « Nul n'a lavé Dieu des crimes dont il est coupable, sinon sans les conditions où le supplicié le plus dur se défait pour mourir et donne les noms (si bien que, des crimes de Dieu, le plus rusé et le plus long à démêler fut le christianisme). »

というよりも、生を愛することがまだ可能なのだろうか。この口にするのものはかられる敗北の中で<sup>43</sup>。

拷問を受けている人間は、いわば磔刑のキリストを追体験する。キリストは神の裏切りを呪う「ラマ・サバクタニ」の言葉を咬いて一度は絶望の中で絶命しながらも、三日後に栄光とともに復活した。被拷問者の場合、キリストと同じように極限の苦しみの中で死んで聖別されることを選ぶか、苦しみを終わらせるために自らが裏切り者になることを、他の人間に呪われる人間となることを選ぶかを迫られる。この小説の主人公ロベールは、苦しみを終わらせるべく、裏切りの道を歩むことになるが、その際、裏切る相手として頭に浮かんだのは、レジスタンスの仲間ではなく、最愛の二人である。

この裏切りをめぐる複雑な論理は、草稿中における謎めいた文句にも反映している。

もしレジスタンスが何か深遠なものであるならば、あなたはそれを裏切るべきだったのだ。大きな意味があるものは裏切ることができるのだ<sup>44</sup>。

バタイユがここで展開している、裏切ることのできる「深遠なもの」とは何か。それは裏切りすら許容してくれる他者である。この他者は裏切らずに死ねとは言うかわりに、非拷問者が死ぬよりも自分を裏切ることを選べと言う他者である。

バタイユは問う。裏切りは絶対的な悪だと言い切れるだろうか。死の恐怖に直面したとき、それしか道がないとしたら、裏切りは人間性の正常な、自然な発露だと言えるのではないか。なるほど、レジスタンスは裏切りを称揚しない。殉教者を聖別するキリスト教も同じである。こうした観点から『C神父』を読み直すとき、主人公のロベールが神父にしてレジスタンスの一員として設定されているのは意味深い。バタイユは彼に裏切る自由を与えたのである。

---

<sup>43</sup> *Ibid.*, pp. 722-723. プレイヤード版で『C神父』の関係草稿とされている断片だが、内容的には、むしろ『クリティック』誌の記事「処刑人と犠牲者についての考察」と密接に結びついている。

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 741. ゲシュタポに逮捕される前、聖職を捨てて、放蕩の生活を送っていた時期のロベールのメモにあった「裏切りは最大の美である」という言葉もこの観点から理解することができるのではないだろうか。

## 弱さの共同体

ロベールは裏切る。それは彼の意志というよりは、状況がそれを強いたのである。裏切った瞬間、ロベールは犠牲者から処刑人に反転する。条件さえ整えば、犠牲者と処刑人の役割は交換可能である。それは小説中ですでに、シャルルとエポニーヌが自室の窓から覗き見た深夜の暗闇の中で、神父ロベール（犠牲者）と肉屋アンリ（処刑人）との視覚的類似に予示されていたことである<sup>45</sup>。

しかも、この論理を延長すれば、ゲシュタポもまた、決して自分とは関係ない「怪物」などではなく、何かの状況が揃えば自分もそうなるという可能性のある「犠牲者」だったと考えることもできる。ゲシュタポの悪もまた、それを拒めば、いつでも自分が処刑される側に反転するという制度に裏打ちされていた。実際、アイヒマン裁判を傍聴したハンナ・アーレントが見た、とてつもない悪を犯した人間の「凡庸さ」もまた、処刑人と犠牲者を分かつ壁の薄さを証している。

実際、『C 神父』の執筆時期に近い1947年に『クリティック』誌に発表された「処刑人と犠牲者についての考察<sup>46</sup>」において、バタイユは拷問を行う人々が「弱さ *lacheté*」によって犠牲者を打っているということ<sup>47</sup>、そして何よりも、彼らが特別な怪物だったのではなく、状況次第では自分たちであったかもしれないことを詳細に論じている。

自分の中に苦痛を受ける可能性、卑劣なことをしてしまう可能性に気がつくことなしに私たちは人間ではいられない。しかし、私たちは単に処刑人たちの犠牲者となる可能性があるだけではない。処刑人たちは私たちの同類なのである。

[...] 辛い沈黙の中で、こうした出来事が、自分たちからもっともかけ離れ、想像もつかないようなものでありながら、自分たちの所業であることをどうして見ずにいられようか。私たちのうちにあつて自分から区別できるもの、自分とは別と言い得るもの、「ありえない、絶対に」と断言できるものなどない。「絶対に」なんてとんでもない。私たちは千差万別の状況次第で何にでもなり得るのである<sup>48</sup>。

---

<sup>45</sup> *L'Abbé C., ibid.*, p. 684: « Étrange ! lui dis-je, dans la nuit, les bouchers ont l'air de prêtres. » また、冒頭の塔の場面で、シャルルが制服姿の拷問者たちに囲まれたロベールの姿を幻視しているのもその後の運命の予示である。

<sup>46</sup> Georges Bataille, « Réflexion sur le bourreau et la victime », *op. cit.*, pp. 262- 267.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 264.

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 266.



つまり、誰もが拷問者にもなり、犠牲者にもなり、裏切り者にもなり、対独協力者（コラボ）にもなり、レジスタンスにもなり、反ユダヤ主義者にも等しくなったのかもしれない。実際、ナチス占領からの解放後、粛清の名のもとに、レジスタンスによって対独協力者たちの大規模な私刑が行われ、それが戦後のフランス社会の融和に大きな影を落としたことは周知の事実である。犠牲者は虐殺者となり、虐殺者は犠牲者となり、また犠牲者は……。この反転は今も世界中で続いているが、この小説『C 神父』は、愛する女性の窓下に毎晩、汚物を残しに行くことに飛び跳ねるような喜びを感じていた無辜の神父ロベールが、自分の兄弟とその女性をゲシュタポに売り、死にいたらしめたことに苦しみながら死ぬ姿を通じて、忠誠という美德の裏に潜む残酷さ、裏切りの人間性、そして、裏切りという弱さすら許容してくれる人間関係の可能性が問われている。その問いが目指しているのは、第二次世界大戦がフランス共和国に残した未曾有の傷口——裏切った者と裏切られた者の分断——をいやすための論理を素描することである。

## 結論

以上に見てきたように、従来提示されてきたこの物語の解釈——ロベールはその裏切り行為によって、善悪を超えたサド的な「至高者」を目指したというややステレオタイプな解釈——では、この小説が持つ奥行きを理解するのに明らかに不十分であろう。小説『C 神父』とは、人間性をめぐる物語、とりわけその「弱さ」と「赦し」をめぐる物語なのである。ただし、その赦しが得られたかどうかは「謎」のままである以上、より正確に言えば、この小説は「弱さ」と「赦し」への期待をめぐる物語であると言える。

人は英雄であろうとしても、裏切り者になってしまうこともあるし、正しくであろうとしても、間違いを犯してしまうこともある。人間はパスカルの本一の葦のように弱い。だが、そうした裏切りや弱さすら、さらには、裏切りを強制する拷問者の残酷さまでもが人間性の一部であるあるというのがバタイユの世界観である。バタイユにとっては、一部の特殊な「怪物」たちが想像もつかないような戦争犯罪をしたり、一部の卑怯者たちが裏切りをしたのではない。状況を整えば、人間は誰もがそのような「怪物」や裏切り者になりえる。この認識が、バタイユに本小説を書かせ、「処刑人と犠牲者についての考察」の記事を書かせた。

ただし、それは人間性を悲観するためではない。人間性をそうしたものとして引き受けることで、正義の名の下に悲劇を繰り返すことの不毛さを、肅清という復讐の連鎖の虚しさを訴えたのである。実際、アンリ・ルソンの『ヴィシー・シンドローム<sup>49</sup>』にも詳しいが、ナチス占領期から解放後にかけて、フランス内部の分裂は壊滅的だった。占領期には、ゲシュタポによるレジスタンスの迫害、拷問、処刑、ユダヤ人強制移送が行われる一方、解放後にはレジスタンスたちによる対独協力者に対する激しい肅清と私刑が行われた<sup>50</sup>。体制が変わっても、つねに正義の名の下に、拷問、迫害、処刑が行われる状況は変わらない。勝者が敗者を鞭打つことの意味とは何か。この小説を書きながら、バタイユは自分の思想に問うていたはずである。

言うまでもなく、この小説に見られるのは、秘密結社アセファル時代の死か抵抗かという、直線的な、机上の単純な二項対立とは明らかに違った思考様式である。そこには、ニーチェ的な超人への意志でもなく、サド的な倒錯の美学でもなく、占領期をしたたかに生き延びた作家・思想家バタイユの成熟が見られる。それは、間違いを犯した人間——「対独協力者」、旧ナチスドイツ国民、肅清を行った者等々を含めて——を赦す可能性であり、赦せないものを赦すための道の素描である。それは、人間性が持つ弱さにもかかわらず、いやむしろ、その弱さゆえに結ばれた共同体の試みと言えるかもしれない<sup>51</sup>。

最後に、途中で置き去りにしてしまった問い、すなわち、どうしてこの小説がこれほど複雑な構成をしているのかに答えて筆を置きたい。理由は二つある。一つは状況的なもので、戦後のフランス社会のアイデンティティ構成に関わる。当時のフランス社会は、ナチス占領期をレジスタンスで戦い続けた共和国という自己イメージを作りあげることによって、占領の屈辱と対独協力という過去を封印しようとしており、その立役者であるレジスタンスの裏切りというテーマは、出版時の1950年、あまりに生々しい、デリケートな内容を含んでいた<sup>52</sup>。ゆえに作品内のディスクリールはいくつもの箱に慎重

---

<sup>49</sup> Henri Rousso, *Le Syndrome de Vichy : de 1944 à nos jours*, deuxième édition revue et mise à jour, Éditions du Seuil, 1987 et 1990.

<sup>50</sup> とはいえ、占領下の国民とは、積極的、消極的の差はあれ、誰しも占領者への協力者であることを強いられている存在ではないだろうか。それはバタイユも例外ではなく、彼の戦中期の作品はこうした角度から読み直される必要があるのかもしれない。

<sup>51</sup> ポール・リクールの「赦しと忘却」に連なる主題である。Voir Paul Ricœur, *La Mémoire, l'histoire, l'oubli*, Éditions du Seuil, 2000.

<sup>52</sup> *Ibid.* ; voir aussi Johan Michel, *Gouverner les mémoires, les politiques mémorielles en*

に包まれて発話された（にもかかわらず、本小説の出版が訴訟事件へと発展したのは冒頭で述べた通りである）。

もう一つはより本質的な理由である。本小説最大の謎は、ロベールの裏切りをシャルルとエポニーヌは赦したのかという点である。作者は周到に全ての発話を死者の伝言にして、一切の手がかりを断っている。多くの研究者の興味を引いた複雑な入れ子構造は、だてや酔狂や形式的実験でもない。それは「謎」を謎として、つまりは赦しの有無を、その可否を謎のままに封印するための迷宮的仕掛けなのである。はたして人間性への問いかけとしてバタイユが本小説に隠したこの最後の謎を解くテーセウスが現れる日は来るのだろうか。